

「風葉和歌集」の構造

——夏部・冬部について——

序

文永八年（一二二一年）の冬、後嵯峨院皇后である大宮院（藤原姞子）の命により撰せられた「風葉和歌集」（以下「風葉集」と略す）は、当時存在したと思われる二百に及ぶ物語の中から、凡そ千五百余首にもものぼる物語歌を抜き出し、配した歌集である。部立や詞書・歌材の配列は勅撰集の型を継承し、二十卷（但し、現存本は末尾二巻が散逸している）もの内容を有している。

これまで、この「風葉集」の部立配列・離別・鬘旅・神祇・釈教・賀・哀傷、そして春部（上・下）・秋部（上・下）の各

米田明美

構成について考察を加えてきた。^{（注一）}その結果、賀部には大嘗会屏風歌群を模したと考えられる歌群が存すること。神祇・釈教部には各冒頭部に神詠・仏詠の小歌群を持つこと。また春下部巻頭歌は、「統古今集」春下部巻頭歌の後嵯峨院御製歌を意識して置かれたことなど種々の問題点が認められた。以上のことから、「風葉集」は勅撰集の構成に熟知した人物が撰者であることはほぼまちがいない。しかも「風葉集」の直前に編纂された「統古今集」との類似が指摘されると言えよう。加えて「風葉集」は、賀部に存する藤原氏贊美の小歌群や、春下部巻頭歌等から物語歌を集め並べただけとは言え、下命者である大宮院を含む西園寺（藤原）一族を頌功し、後嵯峨院の栄華讃仰を込めて網まれたことが示されると思われる。

以上の点を考慮に入れつつ、今回四季部の中の夏部七十七首・冬部八十首に関し配列を中心にその構成を検討して行きたい。

夏部と冬部については、先行する勅撰集において四季部全体の割合からみると、「千載集」「新古今集」「期に至って始めて冬部の歌数が優位になることが、有吉保氏により既に指摘されて^{へ注二}いる。しかもその傾向は、「新古今集」以後も受継がれている。「風葉集」の次の「統拾遺集」までの夏部・冬部の割合（四季部内においての割合、雑存・雑秋部は含まない）については、次の〈表〉の通りである。

四季歌 合計	冬 部	夏 部	勅撰集	
			古 今	後 撰
342	29	34	拾 遺	後拾遺
507	65	70	金 葉	詞 花
262	48	58	千 載	新古今
424	48	70	統後撰	統後撰
325	52	66	統古今	風 葉
158	21	31	統拾遺	
475	90	89	歌数(%)	歌数(%)
706	156(22.1)	110(15.6)		
442	81(18.3)	56(12.7)		
522	74(13.4)	70(12.7)		
689	146(21.2)	103(14.9)		
448	80(17.9)	77(17.2)		
468	92(19.7)	69(14.7)		

「千載集」では、夏部・冬部の差位がわずか一首であったものの、次の「新古今集」では冬部に四十六首もの急増がみられた。以降、「統後撰集」を除き、勅撰集で冬部は、夏部に対し三十〜四十首の優勢となつてゐる。「風葉集」の場合、冬部優位の傾向はそのまま継承してゐるものの、その差は三首にすぎず、「統後撰集」の四首の差とほぼ同じと言えよう。ただ〈表〉より四季部全体の比率から考察すると、「統後撰集」は冬部の割合が低く、「風葉集」は夏部の割合が高いという結果になつた。つまり「統後撰集」は割合からみて冬部の歌数が少ないのに対し、「風葉集」は夏部の採歌数が多いため各々その差が接近したことになる。う。「風葉集」の夏部の増化は、一つの特色と言つて良いであらう。

○ 夏部

夏部の巻頭歌群は、

やよひのつこもりのよ右大将御とのいして侍けるをあ
けはてゝいとま給はすとてよませ給ひける

よその思ひの御門の御歌
 134 かさねつる袖のなこりもとまらしなけふたちかふる蟬のは
 衣

冷泉院御息所いまたまあり侍らさりけるにうつぎのつ
 いたちころに申しつかはし侍ける 源氏宰相中将
 135 花をみて春はくらしつけふよりやしげきなげきのしたにま
 とはん

閑白のもとにまかれりけるに右大将のをさなく侍ける
 をみてにはのさくらの一むらのこれるをおしをりてよ
 める

しのふくさの宮の中將

歌番号	物語名	詠者	詞書の要約	歌語	配列
134	四季物語	帝	やよひのつごもりの夜…	今日たちかふる	更衣
卯の花の女御					
135	源氏物語	宰相中将 (「夕霧の子」)	…うづきのついたちころに…	今日よりやしげき噴きの	卯月
136	しのぶ草	宮の中將	…庭の桜の一群残れるを押し折りてよめる	春の形見	春の形見
137	四季物語	ほととぎすの帝	四季物語の中に	卯の花	卯の花
卯の花の女御					

136 さくら花梢に残るひとむらや過にし春のかたみなるらむ (注三)

である。巻頭歌は、散逸物語「よその思ひ」だが、詞書に「やよひのつごもりの夜」、歌中に「今日たちかふる蟬の羽衣」と示される如く、春から夏への狭間の夜の思いと更衣について詠じた歌で、夏部巻頭を飾るのにふさわしいと言えよう。次の134「源氏物語」歌は、詞書に「卯月の一日ころ」と記され、夏の始まりを示した配置であろう。136の散逸物語「しのぶ草」歌も、梢に残る桜の花の一群を見て、「過にし春の形見」と詠み、春の名残を挿入させつつ夏の訪れを語るといふ配列で、初夏の微妙な自然の移ろいを表わしていると思われる。

次に「風葉集」夏部の配列を示す一覧表を掲げてみたい。

⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮
宇治の河渡	源氏物語	しのぶ草		みかはに咲ける	狭衣物語	みれどもあかね		うきなみ	流れて早きあすか川	ふせ		落窪物語
藤中納言女	夕霧の左大臣	前斎院	中納言	前関白	帝(「狭衣大将」)	関白	中将	権中納言	東宮	侍従内侍	頭中将	よみ人しらず (「屏風歌」)
祭のころ…	藤原侍、祭の女使し侍りけるに…	返し	祭の日、…	「あふひてよ名をかけて見せなん」と申して侍りける女の返し	祭の日、近衛づかきの斎院に参るを…	これを立ち聞きて	…ほととぎすの鳴くのを聞きて	…ほととぎすのほかに鳴けば	廻しらす	返し	夏の初めつく方、夜更けて…	…七十賀屏風にほととぎすを待てる所
草	名をだにも聞かで年経る	今日のかざし	今日のかざし	あふひ 今日のかざし	今日のかざし	今日のかざし	深山をいでしもほととぎす	深山を出づるほととぎす	ほととぎす	忍び音	忍び音	ほととぎす待ちつる宵の忍び音

賀成祭

(初音) (初音) (初音) (忍び音) (忍び音) (忍び音) (忍び音)

⑬④	163	162	161	160	⑬⑤	⑬⑥	⑬⑦	156	⑬⑧	⑬⑨	⑬⑩	152
みやまがくれ	岩清水物語		狭衣物語		なると	いせを	岩垣沼	浜松中納言物語	うきなみ		みかきがはら	狭衣物語
式部卿のみこの女	兵部卿のみこ	秋の大將	(狭衣大將)	中務卿のみこの家の小宰相	中納言	左大將	頭中將	中納言	藤中納言女	權中納言	内大臣	帝(『狭衣大將』)
題しらず	返し、娘に代りて	五月五日女のもとに遣はしける	御返し	…五月四日の夕つかに…軒のあやめを引き落とす…	…葎橘を取りて	題しらず	…間近き橘にほととぎすの鳴くを聞きて	…ほととぎすの鳴きければ	返し	…ほととぎすの鳴くを聞きて	…ほととぎすの忍び音あらはれて踊らひみたる声も…	…ほととぎすのほのかに鳴くを聞かせ給ひて
長き根をかくるあやめ草	今日は引くなるあやめ草	引けるあやめの根(音)	軒のあやめ	あやめ	花橘	花橘	花橘	花橘	ほととぎす	ほととぎす	ほととぎす	ほととぎす

花橘

(五月四日)
(五月四日)
(五月五日)
(五月五日)

ほととぎす

176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165
松浦宮物語	物語名不詳	左も右も袖めらす	あらば逢ふよのと 嘆く民部卿	はしたか	源氏物語	朝倉	あらば逢ふよの と嘆く民部卿		あしのやへぶき		ものねたみ
参議氏忠	詠者名不詳	准后	姫宮の中納言	閑白	重兵部卿のみこ	三条院	.	よみ人しらず	家の少将	按察大納言女	登華殿御息所
…ほととぎすの声の変らぬを聞きて	…ほととぎすの鳴くを聞きて…	山里に住み侍りける太政大臣…	五日、ほととぎすを聞きて	娘のもとに忍びて侍りける文をみて…	…ためしにも引き出でてつべき根に付けて遣はし侍ける	て 五月五日いみじう長き根を皇后宮に奉らせ給ふと	.	院の姫宮の根合の歌	.	.	.
ほととぎす	ほととぎす 鳴きて過くなり	ほととぎす	ほととぎす 空に鳴く音	ほととぎす 忍びにし声あらはれてほととぎす	あやめの根(音) あやめの根(音)	あやめ草 長き例	あやめ草 深き根	あやめ草 長き例	あやめ草 例に引ける	あやめ草 うきね	あやめ草 うきねをかくる

あやめ

(五月五日)

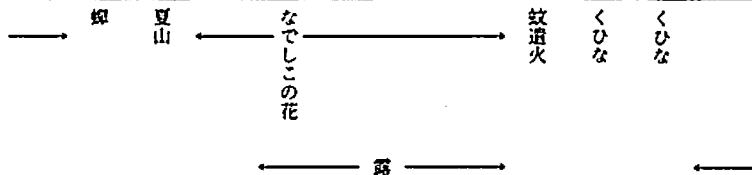
(五月五日)

ほととぎす

189	①89	①87	①86	①85	①84	183	①82	①81	①80	179	178	177
うつほ物語	萩に宿かる	しのぶ	隠れ責		雲の月	うつほ物語	心高き春宮宣旨	みれどもあかぬ	古郷たづぬる	うつほ物語	源氏物語	
侍従仲造	院の女御の母	新大納言	中納言家の宰相	左大将	左大臣	彈正尹親王 三三のみこ	右大臣	関白	權大納言	源太政大臣	よみ人しらす	六条院
…ほととぎすのあまたたび鳴くを聞きて…	”	題しらす	返し	五月のころ女のもとに遣はしける	五月ばかり…ほととぎすの鳴きければ	女に遣はしける	五月雨のころ…	”	題しらす	…五月雨になりにけりと申しければ	御返し	…ほととぎす鳴きて渡るも催し聞こえ顔なれば
ほととぎす	ほととぎす	山ほととぎす	ほととぎす	五月雨 ほととぎす	五月雨 ほととぎす	五月雨	五月雨	五月雨の空	五月雨の空	五月雨 ほととぎす鳴く音久しく	ほととぎす誰らふ声	ほととぎすの詠らひし

五月雨

201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190
源氏物語	左も右も袖ぬらす	うつほ物語	物語名不詳	源氏物語		石清水物語	朝倉	狭衣物語	源氏物語		やせ川
六条院	太政大臣	兵部卿の宮	詠者名不詳	薄雲の女院	六条院	中関白	式部卿のみこ	帝(『狭衣大掬』)	六条院	花散里	衛門佐
.	廻しらず	藤夜 <small>る</small> の女御いまだ参り侍らざりけるころ遣はしける	むすめを(以下欠絶)	御返し	折らせ給ひて: :前栽のなかにとこなつのはなやかに咲きたるを	:なでしこにつけて遣はし侍りける	なでしこにつけて女に遣はしける	:蚊遣火さへ煙りてわりなければ	御返し	:くひなの始めて鳴きければ	:ほととぎすの鳴きければ
蛭	うつせみ	夏山の茂き嘆き	なでしこの花	露のゆかり やまとなでしこ	なでしこの花	涙露けき とこなつの花	露けき とこなつの花	蚊遣火	くひな・月	くひな・月	ほととぎす



219	218	217	216	215	214	213	212
うら風に まがふ琴のこゑ		東宮	なると	うつぼ物語	物語名不詳	源氏物語	源氏物語
その夜も更けて風の音も涼しくなりにければ		和歌の浦にて六月破し給ふとて	六月のつごもりに破しに川原に出で侍りて	曇き日釣殿に涼みて…	…蓮の葉に書きつけ侍りける	…池に蓮の花咲き散れるに露の玉のやうなるを見いだして	…六条院几帳の帷に螢を包み置き給ひて…にはかに光るを…
夏過ぎて	夏越し	破	木隠れに人松風	蓮	蓮の露	夏虫	虫
菖夏	六月破	六月破	納涼	蓮	蓮	← 螢 →	

・ 歌番号は、中野莊次・藤井隆著「増訂 風葉和歌集」に依る。
 また以下の引用もこれに依る。
 ・ () は、物語本文に返した場合の内容補充を示す。(以下、冬部の一覧表も同じ)

○ の附してある歌番号は、散逸物語及び、現存物語の散逸部分に属していた歌であることを示す。

・ () の有する歌は、贈答歌或は、連続して物語から抜き出されたことを示す。

この一覧表の通り巻頭歌群の後、配列は「卯の花」はとと

「ぎす」へと展開し、凡そ勅撰集の型通り並べられているのが理解できよう。その「ほととぎす」にしても、忍び音(143)から初音(143)と時間的推移を丁寧に示そうとする苦心がみられる。「ほととぎす」は「風葉集」夏部では、その歌数として第一位を占め、三か所に分散して置かれている。これは先行する勅撰集においても、夏部の主要な歌材として歌数も多く、また四月の忍び音・初音・五月雨の折…と各所に散在している傾向をそのまま踏襲していると言えるであろう。その中で以下の配列で注目されるのは、賀茂祭にまつわる六首とあやめ(節供・根合せ等)の十三首の小歌群についてであろう。

まず賀茂祭に関する六首(146)であるが、賀茂祭は通例四月の中の西の日に催され、勅撰集ではそれに因む歌材の「葵」・「祭」として置かれていることが多い。夏部としては、「後撰集」「詞花集」「千載集」「新古今集」に各二首ずつ採られ、「新勅撰集」「統古今集」に三首ずつ入首されている。(「統後撰集」にはない。)「詞花集」頃から夏部の歌材として定着してきたものの二、三首程度であり、「風葉集」の六首はその倍ということが多いと言えるであろう。賀茂祭は作り物語に必ずと言って良い程登場する祭であり、物語ではこの祭により季節を

知り話が展開するのである。「源氏物語」葵の巻の葵の上と六条御息所の車争いの場面は有名であり、また賀茂の斎院に選ばれた女性を巡っての悲喜劇は、「狭衣物語」に代表され以後の作り物語にも多大な影響を与えている。祭の日髪飾りとして付ける葵の葉は、「逢ふ日」に掛け男女の恋の駆引きの場で詠じられる。ただ「風葉集」では単に「葵」としてではなく、148 149の散逸物語「しのお草」の様に、「祭の日さきの斎院にきこえ侍ける」と詞書されるものの、歌には「もろかづら」「かざし」が詠み込まれている。同じことは次の150「源氏物語」歌においても詞書には「藤典侍まつりの女つかひし侍けるに…」とあるものの歌中には「けふのかざし」であり、151の散逸物語「宇治の河浪」歌にも詞書に「まつりのころ…」と記されるものの歌には「名をだにも聞かで年経る草」と「葵(あふ日)」の名を婉曲に表現した歌が続いている。つまり各勅撰集の様に単なる「葵」「祭」の歌語を含んだ歌群でなく、賀茂祭としてその種々の姿を描き出すとする小歌群ではないだろうか。

次に「あやめ」十三首(160)について考えてみたい。「あやめ」が勅撰集夏部の配列に加えられるのは「拾遺集」以後であるが、八代集では「金葉集」の八首を除き凡そ一、三、四首どまりである。八代集以後についても「新勅撰集」三首、

「統古今集」四首（「統後撰集」はない）であり、やはり「風葉集」の十三首は秀いでいると言わざるを得ないであろう。

「あやめ」もまた作り物語になくはならぬものである。「枕冊子」三十七段に五月の節日になると、内裏を始め貴族・庶民に至るまでこと如く屋根に葺いたことが綴られている様に、季節を示す描写として必ず登場し、また根合せなども頻繁に行われる。「あやめ」は泥中に生えることから、「浮き根」と恋に悩み泣く「憂き音」が掛けられることが多く、縁語としても「流れ（泣かれ）」、「長きためし」「水」等が詠み込まれ、男女の贈答歌の恰好の歌材となつたであろう。

恐らく作り物語において、「葵」「あやめ」は季節の行事の一つとして描かれてはいるだけでなく、互いの愛情を確認し合う、或は報われない自らを嘆く主人公達の氣持を代弁する歌語として「逢ふ日」「憂き音」という意で提供され、数多く詠まれたであろう。「風葉集」での「賀茂祭」「あやめ」に関する歌数の多さは、そのまま作り物語中で登場人物達が恋に悩んだその数を示し、その場で詠じられた歌の多さを物語っていることにならぬであろうか。加えて、「賀茂祭」「あやめ」の歌数の増化が、或は「風葉集」夏部膨張の一因と言えるのではないだろうか。

二

以上勅撰集と比した上での配列について論じてきたが、次に各歌を物語本文に返した場合の問題点について触れてみたい。

（たいしらす）

六条院御歌

20よるをしる蛍をみてもかなしきは時そともなき思ひ也けり

玉かつらの尚侍のもとにたちちよりて侍けるに六条院几帳のかたひらに蛍をつゝみ置給てうちかけたまへにはかにひかるをほとなくまきはしかくしければ

ほたるの兵部卿のみこ

20なくこゑのきこえぬ虫の思ひたに人のけつには消る物かはかへし
尚侍のみこ

20声はせて身をのみこかす蛍こそいふにもまさる思ひなるらめ

まず光源氏の詠じた20歌は、詞書は附されていないものの、前の散逸物語「左も右も袖ぬらす」歌の「題しらす」を受けていると考えられよう。「物語二百番歌合」に採用されている同歌が「紫の上かくれ給ひて後、蛍の飛び交ふを御覧じて」と詞書が附されている如く物語場面に返すと、紫の上の死後蛍の飛

ぶを見て、光源氏が自らの悲嘆を独詠したものである。物語本文にも暦日は示されていないものの、「いと暑きころ、涼しき方にてながめたまふに」とあり、「螢のいと多く飛びかふも」と「風葉集」の前後の配列と矛盾はみられない。だが「題しらず」と詞書されているのである。物語本文は伝っており、しかも配列との相異もみられないのに「題しらず」と記されているのは、何か撰者の思わくがあるのであろう。春(上・下)部でもこの「題しらず」歌について述べたが、^{〔注四〕}詠者の悲愴感深う歌が多く、それはこの加歌にも当てはまるであろう。詞書を付さないということ、逆に詠者の苦悩を説者に推しはからそうとする手法なのだろうか。更に他部にも調査した上で結論を導きたい。

次の加歌は、玉鬘を恋する螢兵部卿宮の前で、光源氏が螢の光で玉鬘の姿を浮かび上がらせるといふ有名な場面の後、玉鬘と螢兵部卿宮の贈答歌である。物語場面としては、同じ夏部17の歌

玉かつらの尚侍のもとにためしにもひきいてつへきね
につけてつかはし侍ける

ほたるの兵部卿のみこ
17けふさへやひく人もなきみかくれにおふるあやめのねのみ

なかれん

の前に存する。物語中の暦日では、17歌が五月五日で、この加歌はその前の五月三・四日頃のことかと推定される。「風葉集」の配列からみると、間に三十首もの歌が置かれている故、何日もの隔りがあるような錯覚を感じてしまう。逆に言えば、「風葉集」独自の配列鑑賞を優先させ、物語歌は並べられたのであり、「源氏物語」でさえもそのストーリーは解体され、一首の物語歌として位置付けられていることが指摘できよう。

三

以上夏部について種々考察を加えてきたが、まず「風葉集」の場合先行する勅撰集と同様に夏冬部歌数を比較した場合、冬部が数の上では優勢なものの、割合から見ると夏部の歌数が秀いでいるという結果となった。この夏部増大は、一つの特徴と言つて良いであろう。

配列では、「更衣」に始まり、「卯月」「卯の花」「ほととぎす」「賀茂祭」「花橘」「あやめ」「五月雨」「くいな」「蚊遣火」「なでしこ」「夏山」「蛸」「螢」「蓮」「納涼」「六月祓」「暮夏」と、勅撰集の型通り並べられている。その中で、「賀茂祭」「あ

「やめ」が、作り物語の中で男女の恋の駆引きの場で、また季節感を与える内容として頻繁に登場することを反映してか、数多く入集されていることが問題点として挙げられよう。

また各歌を物語本文に返した場合、物語本文が存しかつ配列と矛盾はないと考えられるのに「題しらず」の詞書された光源氏の独詠歌の存在、「源氏物語」歌でさえもそのストーリーは解体され、「風葉集」独自の世界を鑑賞すべく配列に則って位置していること—このことは、いかに配列に工夫がこらされた歌集であるかを示しているよう。

○ 冬部

更に冬部について、その配列・構成について考えてみたい。冬部の配列の展開を示す一覧表は次の通りである。

原番号	物語名	詠者名	詞書の要約	歌語	配列
369	源氏物語	右衛門督	神無月のついたちころ…	秋は行きけん 紅葉の陰	秋果てし 紅葉
368		切兵部卿宮		秋果てし	
367	源氏物語	右衛門督	題しらず	秋果てて 四方の風・木の葉	木枯 木の葉
366	源氏物語	大宰権帥重康	…紅葉の散るを見て	木枯 紅葉ば	散紅葉
365	源氏物語	女すゝみ	…しぐれがちなる空の気色…	時雨・あきはてし	初時雨 →
364	源氏物語	右大将	女のもとより帰りて…	秋・時雨	
363	源氏物語	朝倉	題しらず	袖・時雨	配列
362	源氏物語	皇后宮の内侍	題しらず	袖・時雨	
361	源氏物語	藤壺の女御	神無月のついたちに…	袖・時雨	

384	383	382	381	380	379	378	377	376	375	374	373	372
うつほ物語	みなせ川	みふね	あひずみ苦しき	をぐるま	うたたね	おもかげこふる	夜の寝覚め	長月のわかれ	狭衣物語	うもれ木	とりかへばや	四季物語
修理大夫忠章女 (宮内御息保女)	新中納言	太政大臣	源大納言三の君	麗殿の女御	后宮	三位中将	関白	帝	帝(狭衣大将)	少将	さきの太政大臣	時雨の式部御のみ
少将仲頼水の尾にこもりて侍りける後…	…冬のころ遣はしける	…ただ船り侍りける道に月を見て	…月にはかにかき登りてしぐるるを見て	…時雨を聞き明かして	…時雨の音まことに聞きなされさせ給ひて	…しらす	…常よりもしぐれ明かしたるあしたに遣はしける	…時雨かきくらす夕べに遣はさせ給ひける	…にはかに登りしぐるるれば…	…うち登りしぐれければ	神無月ばかり、時雨いたうする日…	四季の物語の中に
霜置く山の嵐	峰の嵐	月・霜	月・時雨	おとづれの絶えぬ時雨	音絶えぬ時雨	時雨の音	時雨の音	袖・時雨	涙・時雨	涙しぐるる袖の上かな	時雨・涙	時雨 紅葉は散りぬる

時
雨

嵐

嵐

月

月

(時雨の音)

(時雨の音)

(時雨の音)

(時雨の音)

散紅葉

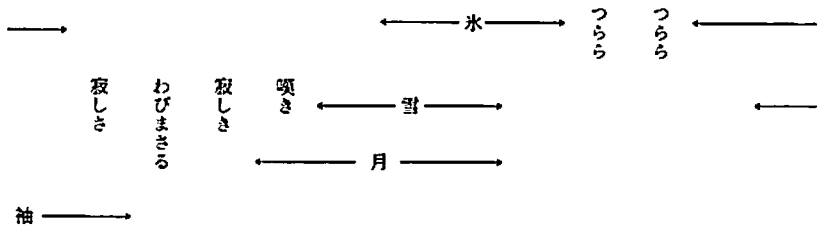
397	396	395	394	393	392	391	390	389	388	387	386	385
はしたか	狭衣物語	うたたね	親子の中	もにすむ、し	しくれ	源氏物語		うつは物語	みかにはに咲ける		四季物語	狭衣物語
按察大納言	帝(『狭衣大将』)	帝	内大臣	権中納言	中将これすけ	中の君	薰大将	権中納言忠能 (忠澄か)	女院の御匣	閑白	秋の内侍のかみ	帝(『狭衣大将』)
池のをしの鳴くを聞きて	池に立ちみるをしの音なひも同じ御心におぼされければ	池に水鳥どもの遊ぶを御覧じ出でて	池の水鳥の番離れぬをうらやましく見て	水鳥の声をあはれに聞きて	千鳥の鳴くを聞きて	返し	宇治にてよみ侍りける	嵯峨院のきさいの宮の御賀の屏風に	返し	女のもとより掃りたる人に代りて	四季物語の中	尾花がもとの草も霜深くなりゆくを御覧じて
をし鳥 さゆる霜夜	をし鳥 をし鳥	かものうきよ をし鳥	水閉ちたる をし鳥	凍る・鶯鶯	さよ千鳥	暁の霜・千鳥	霜さゆる・千鳥	水魚 (多くの冬を)	冬の日・あしたの霜	朝霜・冬の日	露・朝霜	霜枯れて 道芝の露

水鳥

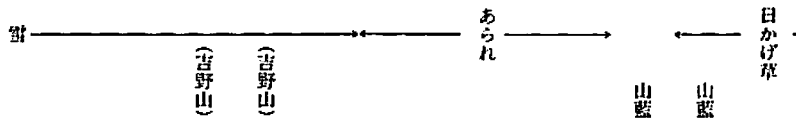
千鳥

霜

410	④03	408	407	④05	④05	④04	403	④02	④01	④00	③99	③83
源氏物語	親子の中	狭衣物語	源氏物語	つまこひかぬる	ささわけしあさ		源氏物語	夕霧	ささわけしあさ	四季物語		われから
夕霧	内大臣	帝(=狭衣大将)	六条院	三位中將	頭中將	閑白	紫の上	二のみこ	閑白	鴨の帥の宮	鳩の君	播磨の守
五節の筈姫に遣はしける	女のもとにたびたびまかりて…	…吉野川のわたりにてみきはの水閉ち込めて…	薄雲の女院かくれ給ひて後…恨みたるさまにて夢に見えさせ給ひければ	題しらず	.	…雪降り月おもしろき夜、詩歌など奉り侍りけるに	雪の降り積もれるに、月くまなくさし出でて…池の水えもいはずすこきに	女に遣はしける	…忍びてまかりて嘆き明かして	.	四季物語の中に	相添ひて侍りける女の…
天の羽袖 日かげ	片敷きの袖 寂しさ	水の下・わびまさる	寂しき冬の夜	冬の夜の月 嘆きわび	雪降りしける 夜半の月影	池の水・月影	水閉ち・月の影	袖に氷りつつ	袖のつらら	つらら・浮き枕	にほの浮き巢	をし・霜



⑫③	⑫②	421	420	419	⑪⑧	⑪⑦	⑪⑥	⑪⑤	414	⑪④	412	411
ふたよのとも		落窪物語	浜松中納言物語	浜松中納言物語	めもあはぬ	水あさみ	末葉の露	海人の刈る藻	源氏物語	物語名不明	みかきがはら	
上人	上人	よみ人しらず (屏風歌)	中納言	中納言	右大臣	左兵衛督	右大臣	権大納言	中の君	五節(?)	大納言典侍	右大臣(右大将か)
.	雪の朝に:	大納言忠頼の七十賀の屏風に山に雪高う降れる家 ある所	吉野に住み侍りける人に遣はしける	: 雪の降りければ	: 日ごろ心もとなかりける雪、かき暗し降りて:	: あられの降りければ	: あられの音のおどろおどろしきを聞きて	世を逃れむとて出でける道に:	夕暮の空の気色いとすごうしくれたる日:	忍びたる男の臨時の祭の舞人にて渡りけるに:	まことに置きたるけるにや:	豊の明りの節会に:
降る雪	降る雪	雪深く・山里	吉野の山の雪の深さを	吉野の山・雪	山深く・雪	あられ	あられ	あられ降る深山の里	あられ降る深山の里	山藍の衣	山藍の袖 日陰草	日陰草かざす袖



㉔	㉓	㉒	㉑	㉐	㉏	㉍	㉌	㉋	㉊	㉉	㉈	㉇
	狭衣物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	しのぶ	玉藻に遊ぶ権大納言	四季物語	かはほり	浜松中納言物語	吉野	源氏物語	
齋院(源氏宮)	後一条院	大君	六条院	冷泉院	新大納言	院	朱雀院	雪の帝	少将	中宮(中の君)	女院	明石の上
御返し	…雪いたく積もりて…	雪のうちに薫大将まで来て…	御返し	六条院太政大臣にもし給ひける時…	…雪御覽せし御供つかうまつりしことなど思ひ出でられ…	…雪の降る日遣はさせ給ひける	…雪の朝に遣はさせ給ひける	四季の物語の中に	雪の降る日、ひぐらしながめて燃るとてよめる	同じ山に住みて…	吉野山にて雪の降る日よませ給ひける	…雪かき暗し降り積もるに…
雪の消えも果てなで	白雪の消え返りつつ	雪深き山	小塩山 みゆき積もれる	雪深き小塩の山	小塩の山 みゆき	白雪・高野	雪	白雪	雪ふるさと	み吉野の雪	雪積もらん	雪深き深山の里

(小塩山)

(小塩山)

(小塩山)

(高野山)

(吉野山)

(吉野山)

443	442	441	440	㊸	㊹	㊺
我身にたどる姫君	うつほ物語	源氏物語		ふきこす風	かやが下折れ	
皇后宮の宰相 (宰相の君)	右大将仲忠	御導師	六条院	宰相中将	関白	宣耀殿の女御
年の暮によめる	嵯峨院の後の宮の御賀の屏風に仏名したるところ	御返し	仏名などことしばかりにこそはとおぼしめして……	雪の降る日遣はしける	返し	雪の積もりたる暁の空をいぎなひて見せ侍りける
雪降りて暮れゆく年の数ごとに	千代もますらん・仏の数	雪	千代の春	雪の気色	消え残るべき身・雪	白雪の消え返りて
<p style="text-align: center;"> </p>						

冬部巻頭歌は、散逸物語「たゆみなき」歌であるが、

神無月のついたちに「たくひなくうきわかれちの袖のうへにいとふりそふ初しくれ哉」といへる人のかへし
たゆみなきのふちつほの女御

364 たくひなく物思ふ人の袖のうへにけさをわきける時雨とも

みす

詞書に「神無月のついたちに」とあり、また歌中に「今朝を分きける」、つまり冬になった今朝を境にして「立冬」を示し

ており、勅撰集の通例通りである。次に365散逸物語「朝倉」歌では「しぐるる神に神無月空さへ」、366散逸物語「かいばみ」歌には「神無月しぐれざりせば」と詠み込まれ、「神無月」と「時雨」を含む歌を並べている。そして「秋果てて」という歌語、及び「散紅葉」を歌材とした歌五首が置かれ、秋部との脈絡に配慮しながら、秋から冬への微妙な季節の推移を配列に再現していると言えよう。

以下、「時雨」「霜」「千鳥・水鳥」「氷」「月」「霰」「雪」「仏

名」「暮歲」と冬の季節を示す歌材が、巧みに時の流れの足跡を見つめる如く置かれている。ただ先行する勅撰集と比すと「落葉」に関する歌は、わずか二首(313)のみで、十首前後は入集されている勅撰集の通例からするといささか少ない様に思える。「物語和歌総覧」^(注五)の五句索引で「落ちる」「散る」「枯葉」「落葉」等で引いても、非常に少ないことから作り物語にはこの種の「落葉」に関する歌が少なかったのかもしれない。他にこの配列の中で特に注目されるのは、後半の「月」と「あられ」の間にある、新嘗祭に関する詞書を持つ三首と、巻末近い配列の「仏名」の小歌群であろう。

一

まず新嘗祭に関する詞書をもつ三首について考えてみたい。五せちのまひひめにつかはしける　夕きりの左大臣
410 ひかけにもしるかりけりなをとめこかあまのは袖にかけし
心を

とよのあかりの節会にをみにて侍けるにまかつとて有
明の月のおもしろくさえわたれるに

みかきかはらの右大臣
411 めつらしき豊のあかりのひかけくさかさ袖にも霜はおき
けり

まことにおきたりけるにやうちはらへるけはひをかし
かりければ

大納言典侍

412 ひかけくさかさすにいと、霜さえて水やむせふ山あるの袖
三首ともに、新嘗祭などの祭礼奉任の物忌のしるしとして冠に
差す日陰のかずらが「日かげ」或は「日陰草」として詠込まれ
ている。詞書にも「五節の舞姫」「豊明の節会」と記されてい
るが、この宮中の重要な行事である新嘗祭は普通陰曆十一月の
中の卯の日、豊明節会は辰の日、丑寅の両日には豊明節会に舞
う五節舞姫のための帳台の試、御前試などが行われる。冬を代
表する宮庭行事のほずであるが、勅撰集冬部に入集されている
のは、八代集では「金葉集」(一首)のみで、次は「統後撰集」
まで採られていない。宝治二年後嵯峨院に詠進された「宝治百
首」に「冬十首」として「豊明節会」が題に加えられており、
この頃から意識されるようになったのであろう。「統後撰集」
「統古今集」(二首)、そして「風葉集」後の「統拾遺集」(三
首)と続けて入集されており、後嵯峨院歌壇の勅撰集で定着し

始めたと言えるであろう。この系譜を「風葉集」も受け継いでいるわけである。

また次の物語名不明歌(413)は、詞書から察すると、十一月末の酉の日に行われる賀茂の臨時の祭の折のものであろう。この様にもると、「風葉集」四季部は、勅撰集と比して年中行事をその配列により多く組込んでいると思われ、物語歌集としての一つの特徴、或いは独自性と言えると考えられよう。

二

次に巻末近くに位置する「仏名」にかかわる歌三首をみてみたい。

仏名などことしはかりにこそはとおほしめして御導師
のさかつきの御ついでによませ給ける 六条院御歌
柳春までのいのちもしらす雪の内に色つく梅をけふかさして
ん

御かへし

御導師

41千世の春みるへき花と折置て我身そ雪と共にふりぬる

さかの院のきさいの宮の御賀の屏風に仏名したる所

右大将なかつ

42かけて祈る仏の教しおほければ年に一たひちよますらむ
この三首は詞書の書かれ方から考察して、「仏名」としてま
まっていると思われる。仏名会は、十二月十九日から三日間宮
中や諸寺院等で仏名経を誦し、過去・現在・未来の三世の諸仏
の名号を唱えて一年間の罪障を懺悔する法会である。これによ
り罪を消滅させ、新しい年を迎えるために行う儀なのである。
4041の「源氏物語」幻の巻の贈答歌は、最愛の妻紫の上を亡く
し、自らの身辺整理もすませ、「御仏名も今年ばかりにこそ、
と思せばにや、常よりもことに、錫材の声々などあはれにおほ
さる……………」と行つたものである。「春まで命があるかどうか
……………」と現世への決別の気持を込めて詠じる光源氏と、君の
永遠なる御栄えを祈る御導師の返歌であり、「源氏物語」正編
の暮はもうまもなく下ろされるのである。41の「うつほ物語」
歌は、「風葉集」にその十二月廿二首のうち七首も採歌され
ている嵯峨院后宮の御賀の月屏風の歌である。物語本文では、
四・五句が「としにひかりや千代もさすらん」となっている。
「恵の光は千年も注ぐだろう」の意であるが、「風葉集」本文だ
と「年に一度であつても(御寿命は)千年も延びるでありまし
よう」となり、前歌「源氏物語」の御導師の詠じた歌を受けて、

君の長寿を祈る意となると思われる。ただ、「うつほ物語」一部本文に「ひかりや千代もますらん」^{〔注六〕}も存し、「風葉集」独自本文ではない。この「仏名」という歌題であるが、勅撰集冬部において、「拾遺集」冬部巻末近くに四首連続して位置しているものの、他の集には全くみられないものである。勅撰集には定着していないと言いつけるであろう。無論「六百番歌合」冬部には題として採用されており、歌題としての「仏名」は目新しいものではないが、配列を味わう歌集としてその流れをみた場合、一つの特筆すべき特色と言えるであろう。

三

以上、冬部についてその配列と、先行する勅撰集との比較からいささか卑考を加えてみた。冬部については、まず巻頭に「神無月のついたちに」という詞書をもち、かつ「立冬」を詠込んだ歌を置き、「時雨」「霜」「千鳥・水鳥」「月」「新嘗祭」「霞」「雪」、そして「仏名」「暮歳」と配列されている。これは、やはり勅撰集冬部の配列をほぼ踏襲していると言える。その中で、「新嘗祭・豊明節会」に関する詞書を持つ小歌群は、

「統後撰集」「統古今集」頃から冬部に登場したもので、この「風葉集」もその系譜の上に立っていること。また「仏名会」にかかわる詞書の有する小歌群は、先行する勅撰集では「拾遺集」だけであるにもかかわらず位置させているのは、「風葉集」冬部の一つの特徴と言えるであろう。

まとめ

四季部は、季節の移ろいを配列で再現するという大前提がある。花の畜がふくらみ、花が咲き、虫が鳴き、鳥が飛びかう。そして更衣等に始まる季節毎の行事・節会・祭など。これらはその季が巡って来れば繰り返されるもの故、逆に四季部の配列には自ずと限界があると言つて過言はないであろう。花の開く頃は、狂い咲きこそまれ／＼にあれ、古今を通じ定まっている。各勅撰集の四季部も、この制約を受け、しかしその中で何らかの独自性を持つと撰者達は苦心してきたに相違ないであろう。「新古今集」で始めて冬部が着目されたものの、やはりその配列構造は凡そ類似したものとなっている。

「風葉集」においても、四季部の配列は春・夏・秋・冬どれ

も先行する勅撰集のそれと大差はない。歌材・配列ともに際立つた差はみうけられない。がその中で、わずかであっても「風葉集」のみ歌数の増化のみられるもの(A)、或いは勅撰集で定着していない、あまり用いられていない歌題の存在(B)が指摘できる。これらは、「風葉集」撰者が苦心の上綱み出した物語歌撰集「風葉集」らしき、つまり独自性と言つて良いであろう。今回の夏・冬部において夏部の「賀茂祭」「あやめ草」は(A)であり、冬部の「仏名」は(B)と思われる。加えて「続後撰集」で始めて採用された「新嘗祭」に関する小歌群と合わせて考えてみると、「風葉集」は年中行事をその配列により組込んでいる傾向が伺えよう。「賀茂祭」「あやめ(節会)」「新嘗祭・豊明節会」そして「仏名」と並べると、作り物語に必ず描かれている行事ばかりである。主人公達は各行事を機縁として見初め、文を交したり互いの気持ちを確認したりし、物語は展開する。自らの心情を「葵」の「逢ふ日」や、「浮き根」の「憂き音」を借りて詠じる——どれも物語の進行にはなくてはならぬものである。更にその時間的経過を示し、季節を感じさせるものであり、しかも宮廷行事の華麗な描写は説者に興味を抱かせたであろう。自然、物語中のその場面で詠じられた物語歌も多いであろう。

以上の様に考えてみると、「風葉集」夏・冬部で勅撰集と比べて指摘した幾つかの歌材は、そのまま年中行事を配列の主たる柱とした「風葉集」夏・冬部の構造として結びつけることができるであろう。

〔注一〕拙稿(旧性 原田)「風葉和歌集構造試論―部立考」、中
古文学」第二十八号。拙稿(旧性 原田)「風葉和歌集」の構
造(離別部の構造)、「論叢」昭和五十六年一月。拙稿「風葉和
歌集」の構造―鬮旅部について―、「平安文学研究」第七十三
輯。拙稿「風葉和歌集」の構造―神祇・釈教部について―
「論叢」昭和六十二年一月。拙稿「風葉和歌集」の構造―賀部
について―、「平安文学研究」第七十九・八十合併輯。拙稿
「風葉和歌集」の構造―哀傷部について―、「甲南国文」平成
元年三月。「風葉和歌集」の構造―春部(上・下)について
―、「中古文学」第四十五号。「風葉和歌集」の構造―秋部
(上・下)について―、「論叢」平成三年一月(予定)。

〔注二〕有吉保氏「第一章四季部の構造と特質」、新古今和歌集
の研究―基盤と構成、昭和四十三年四月 三省堂。

〔注三〕引用は、中野莊次・藤井隆氏著「増訂 風葉和歌集」
(昭和四十五年一月 友山文庫)に依る。

〈注四〉〈注一〉参照。

〈注五〉久曾神昇・樋口芳麻呂・藤井隆各氏共編『物語和歌総覧』昭和五十一年十月 風間書房。

〈注六〉流布本系の一部（大橋長憲本・新宮城書蔵本）異本に存する。

（本学非常勤講師）